

「元気のもと」

机に書類を積み上げ、パソコンを凄い勢いでカタカタカタカタ（キーボードの音）やって、ときおり遠くをみつめたりしていたら、やさしい大人の女性代表の某職員が、そっと白い包みを差し出した。

伏し目がちに「お疲れですね」と言葉を添えて。

私は「何だろう？」という表情のまま、うやうやしく両手で包みを受け取ると、そのしぐさが可笑しかったらしく、女性職員は小さく「ふふっ」と笑った。

包みをあけると粒上のアーモンドチョコレートがいくつか入っていた。

胸のあたりから「ほっ」という音が聞こえてきそうだった。

またもや息子の話で申し訳ないが、息子が小さかった頃、長い距離を歩くときにはカバンの中にチョコレートを忍ばせていたことを思い出した。

頑張っって歩いて、目的地までもうひと踏ん張りなんだけど辛い、そんなときに

「はい、元気のもと」

と一粒だけ息子の口に入れてあげると、得も言われぬ表情になったものだ。

私も一粒口に入れる。

互いに顔を見合わせながら、口に広がる甘さを味わう。

じわっとパワーが回復していく。

「もう少し頑張れる？」と聞いたときの、「うん！」という息子の元気な返事と、やわらかいほっぺが愛おしかった。

「一粒だけ」が大事。

いつでも、いくつでも、ではない。

だから、特別なのだ。

息子もわかっている、それ以上せがむことはなかった。

頑張りきれぬ距離であること。

そこに、ささやかなご褒美があること。

それを上手に調整しながら頑張る経験を積み重ねていくと、

力を発揮するための土壌ができる。

